
全身麻酔後に解離性障害を発症した若年女性の一例

小島 丈夫、間嶋 望、南 敏明

大阪医科薬科大学 医学部 麻酔科学教室

症例は21歳女性、身長158cm、体重41kg、数年前からの子宮内膜症による腹痛、腰痛、肛門痛を主訴に、X年7月当院ペインクリニック外来を受診した。不安神経症でエチゾラム0.5mg/day内服していた。疼痛により、日常生活の支障が大きく、母親が介護を行い、母親との間に相互依存関係が見られた。内服薬による疼痛コントロールは困難であり、当科で硬膜外ブロックを施行するも、症状の軽減を認めなかった。疼痛の原因解明のため、X年10月、全身麻酔下で腹腔鏡精査術の施行となった。腹腔鏡精査の結果は、ダグラス窩・左膀胱子宮窩に子宮内膜症の病変を複数認め、同部位を焼却した。術当日は、強い疼痛を訴えるのみで、著変を認めなかった。翌朝より、発声困難、両眼球の上転、四肢の筋硬直、後弓反張を認めた。脳波検査、頭部CT検査などの精査で異常を認めず、精神科受診で過緊張による解離性障害と診断された。ロラゼパム0.5mg/day内服、術後2日目からの母親の付き添いで、術後3日目に症状は軽快した。[考察]手術に対する不安やストレスが契機となり、解離性障害を発症した。精神発達が未熟な若年者や不安の強い患者は、手術前から精神面への配慮が必要であると考えられる。[結語]全身麻酔による手術を契機として、解離性障害を発症した若年女性の一例を経験した。